＊これはゲラですので、出版物での引用はご遠慮ください。『週刊読書人』(https://jinnet.dokushojin.com) 2023年2月10日号６面に掲載されます。
* Please do not cite this manuscript in a publication. The final published version in *Shu-kan Dokusho-jin*(Weekly Reading People https://jinnet.dokushojin.com), Number 3277, 10, Feb. 2023, p.6.

学術読物

キャロル・ギリガン著

もうひとつの声で

心理学の理論とケアの倫理

ケアの倫理の偉大で危ういパイオニア

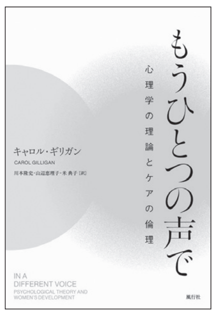
男女二元論が覆い隠してしまう声

西條玲奈

待望の新訳といってよいだろう。アメリカで一九八二年に出版され、一九九三年に増補版が出版されたキャロル・ギリガンの『もうひとつの声で』は、フェミニズムにも倫理学にも古典的著作の一つである。

著者のギリガンは心理学者であり、本書も発達心理学研究における男性中心主義的なジェンダーバイアスを相対化する内容だ。このバイアスとは、被験者の性別が男児に偏りがちだったことだけではない。本書の批判対象であるコールバーグの道徳的な発達指標では、社会が女性の性別役割として期待するケア活動とそもそも衝突しやすいため「女性は道徳的に未熟である」と評価されてしまうという。

これをギリガンは正義の倫理の枠組みでケアの倫理を評価することによる、ある種のカテゴリー錯誤とみなす。正義の倫理は、他人から独立し自立した個人が公平さや権利などの原理原則に基づいて行動を判断する。対比されるケアの倫理とは、他人との関係を基礎に具体的な状況下で相手に対するニーズに応えることを重視する。そしてケアの倫理は、女らしさを期待された人たちの徳として持ち上げられる一方、正義の倫理においては自己と他者の不分離、目の前の状況に流され公平で普遍的な判断能力の欠如の表れとして、低いものとみなされてしまう。本書は、女らしさの役割と結び付けられたケアの倫理を、男性中心主義社会のたんなる従属性のしるしとしてではなく、道徳判断を支えるひとつの枠組みとして描き出す。



四六判・438頁・3300円
風行社
978-4-938662-38-7
TEL.03-6672-4001

本書のこうした特徴こそが、独立した個人を道徳的行為者とみなす伝統的な倫理学理論のオルタナティブとして、またフェミニズム的観点からともに評価される所以だと思われる。本書には適切な訳注と、訳者の一人である川本隆史によるすぐれた解説があり、その価値を読者に伝える助けをしてくれる。

しかしながら本書には、読者の注意を要求する危うい側面もある。一つは性別についての早急な一般化に陥っているように見える点。もう一つは、インタビューの協力者である女性たちの偏りにほとんど言及がない点である。

第一の「早急な一般化にみえる」という誤解は刊行当時から少なくなかったのだろう、「女性たちと男性たちは本当に（本質的に）異なるのか……私の問題とするところではない」（一九頁）と増補版の冒頭で述べられている。しかし、その誤解もやむを得ない。「女性の感覚」「女性の判断」「男性と女性の発達」といった一般化表現が頻出するのだが、これはインタビューの対象となった一四四名の女性と男性各自の経験をもとに性別による道徳判断の違いを相互排他的に結論していると解釈されても仕方がない。

しかし本書の意義を考えるなら、「女性の判断」ということばを「女性とは一般にこのように判断するものだ」とみなすのは、あまり実りがない。評者なりに解釈するなら、むしろ、男性中心主義的な価値基準のもとで「男らしくないもの、すなわち女らしさ」として過小評価されてきた道徳判断と読み替えた方が整合的だろう。個人の経験は特殊個別的なものだが、女らしさという社会規範はその社会で一定の力をもつ。単なる個人の問題ではなく、政治的次元につながる議論でもあるのだ。

しかしさらに注意を要するのが、本書が光をあてたのはどんな女性たちの声なのかという問題だ。女性の思考を代弁する（五八頁）という本書の目的に照らすならなおのこと、特にどんな女性やマイノリティが排除されるかを批判的に検討すべきである。本書で調査対象となる女性たちはみな生まれた時に女性の性別を割り当てられ、幼年期から成人期まで固定的に女性として生活してきたシスジェンダーに限定されている。トランスジェンダーの女性たちは、本書でその存在すら言及されない。

また、中絶のモラルジレンマを扱った第三章のインタビューがシスジェンダー女性のものばかりであるのも懸念が残る。中絶の意思決定と反省を通じて、他者への配慮と自己抑制を求められる女性が自分にとっての善をとらえなおす記述は力強く胸を打つ。しかし中絶を「社会が期待する女らしさ」とのつながりのみで語ることには弊害もある。トランスジェンダー男性や、ノンバイナリーの人々の中絶に関する意思決定プロセスをあたかも存在しないかのような効果を生んでしまうからだ。中絶は社会で女らしさと紐づけられるかもしれないが、その問題を経験するのは女性だけではない。男女二元論前提がほぼ無批判に置かれている点も、本書が先に述べた「粗雑な一般化に基づき男女の道徳的判断の相違を主張する」ように見えてしまう要因に思われる。

日本語の読者は、本書のあてた光が誰の声をなお覆い隠しているのか、そこをあらかじめ踏まえた上で注意して読み進めてほしい。（川本隆史・山辺恵理子・米典子訳）

（さいじょう・れいな＝東京電機大学工学部助教・分析哲学）

★キャロル・ギリガン＝アメリカの倫理学者・心理学者。フェミニスト。ニューヨーク大学の教授。一九三七年生。